

## エンバク在来品種の収集とその利用法

桂 真昭・小橋 健・松岡秀道  
(九州沖縄農業研究センター)Masaaki Katsura, Ken Kobashi and Hidemichi Matsuoka:  
Collection of Oat Landraces and its Utilization

## 1. エンバク在来品種の調査収集

平成13年度ジーンバンク事業で南九州を中心にエンバク在来品種の調査収集を実施した結果、聞き取り調査や形態的特性から在来品種と思われるものが、鹿児島県を中心に12点収集できた<sup>1)</sup>。それらの生育特性は特性評価試験で解明する。

在来品種の利用に関しては、それらのほとんどが小規模な繁殖牛農家で維持されていたことから、冬季の飼料として栽培され、青刈り給与で再生草を利用するというものであった。現在、主に栽培されている極早生品種では再生草の利用は想定されていないが、かつてのエンバク栽培利用においては再生草の利用は一般的であり、在来品種を今日でも栽培する利点があるように感じられたので、次に、エンバク品種の再生程度を検討した。

## 2. 夏播き栽培における年内の再生程度

在来品種を栽培する鹿児島県の畜産農家では、8月に播種して翌春に出穂するまでに4回程度刈り取りを行うということであった<sup>1)</sup>ので、当センターが保有するエンバク品種を用いて、年内の再生程度を検討した。

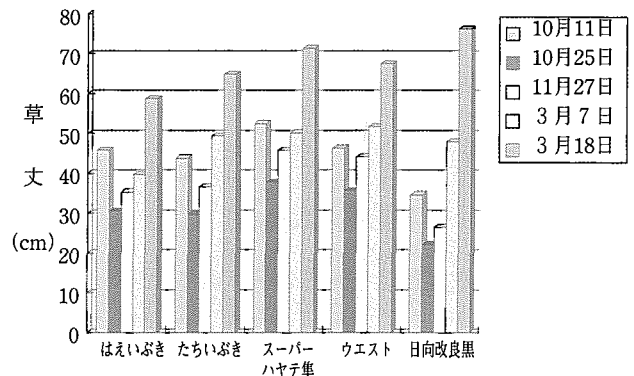
## 1) 材料および方法

供試品種は、夏播き用極早生品種のはえいぶき、たちいぶき、スーパーハヤテ隼、ウエスト、および在来品種由来と考えられている日向改良黒である。2001年9月7日に播種量を330g/aとし、条間0.6m、条長4mで播種した。施肥は、基肥としてN、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、K<sub>2</sub>O、をそれぞれ0.5、1.0、0.5kg/a、追肥として10月5日、26日、11月27日、3月4日にN、K<sub>2</sub>Oをそれぞれ0.5kg/aを施用した。刈り取り調査は、在来種栽培農家の聞き取り調査では伸長すればそのつど刈って給与するというものであったので、いくつかの品種の草丈が30~40cmに達した時を目安に、2001年10月11日、10月26日、11月27日に手刈りで行った。

## 2) 結果および考察

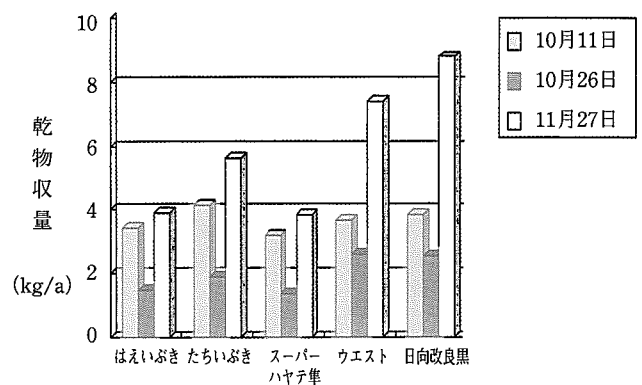
第1図に刈り取り毎および再生草における早春の草丈を示した。日向改良黒の年内における草丈は刈り取り順に35、22、26cmと、夏播き用品種より低かったが、翌春の3月では日向改良黒の草丈は夏播き用品種と同等となり、3月18日の時点では76cmと最も高くなった。これらは、日向改良黒が12月まで刈り取りを行わない夏播き栽培でも出穂せず<sup>2)</sup>、草型が開帳型になる特性とも関係していると考えられる。すなわち、極早生品種は夏播き栽培では年内に出穂する方向で節間伸長が進むが、日向改良黒は低温期を経てから出穂するため<sup>2)</sup>、年内の草丈は低く、翌春に伸長が旺盛に始まるためと考えられる。

第2図に年内の刈り取り毎の乾物収量を示した。10月11日および26日の刈り取りでは、日向改良黒は夏播き用品種とほぼ同程度の乾物収量であったが、11月27日では8.8kg/aと夏播き用品種より多収であり、年内の合計乾物収量が最も高かった。このことは、再生草を青刈りで利用する目的では、夏播き用品種を選択するよりも日



第1図 刈り取り毎および再生草における早春の草丈

向改良黒のような品種を栽培する方が有利であることを示しており、今日でも在来品種が栽培されている理由の一つとして考えられる。また、日向改良黒の草丈が他の供試品種より低いにもかかわらず(第1図)、乾物収量が同程度以上である(第2図)ことから、今回の試験においては日向改良黒の茎数密度が夏播き用品種より高かったことが示唆される。



第2図 刈り取り毎の乾物収量

以上のように、日向改良黒は年内の再生草の乾物収量が夏播き用品種より高いことが示されたが、今後は収集した材料がどのような特性を持っているのかを明らかにする必要がある。すなわち、出穂性や再生程度等に関して、日向改良黒や他の在来品種と同じような特性を示すのか、あるいは、維持されてきた各農家の特性が反映されているのかなど、極めて興味深く、これまでのエンバク栽培を考える上で重要なものになると考えられる。

最後に、在来品種の消滅があらゆる作物において懸念されており、今回の調査収集においてもその危険性を強く感じた。今後とも情報収集に努め、適時、調査収集を実施することが必要である。

## 引用文献

- 1) 桂 真昭・小橋 健・松岡秀道：植探報 18, 45-55, 2002.
- 2) 上山泰史：日草九支報 24, 28-34, 1994.